

アジア歴史問題 現地調査報告^{※1}

北陸大学未来創造学部講師
福山悠介

- (1) 調査期間：平成 18 年 8 月 21 日～8 月 27 日（7 日間）
- (2) 調査地：東京、北京、南京
- (3) 訪問先：靖国神社、東京大空襲戦災資料センター、盧溝橋、中国人民抗日戦争記念館、中山陵、南京中国近代史遺址博物館
- (4) 参加メンバー：学生 6 名（日本人学生 4 名、中国人留学生 2 名）、一般参加者 3 名、教員 2 名、職員 1 名、計 12 名

1. はじめに

2006 年 8 月 15 日、小泉純一郎前内閣総理大臣が、現職総理としては 1985 年に中曽根康弘首相が参拝して以来、21 年ぶりに終戦記念日に靖国神社を参拝した。小泉前総理は、2001 年の自民党総裁選において「私が首相になったら毎年 8 月 15 日に靖国神社をいかなる批判があろうと必ず参拝します」と公約し、8 月 15 日に参拝するという点こそ違えたものの、毎年参拝の公約は果たしてきた。そして総理の辞任を目前にした本年、「8 月 15 日を選んでも批判、反発は変わらない。いつ行っても同じだ。ならば今日は適切な日ではないか」とし、終戦記念日の靖国神社参拝を実現させたのである。

この「靖国問題」を巡って、日中・日韓関係は冷え込んだ。日中関係は「政冷経熱」であり「厳寒期」であるとの評価までされた。2006 年 2 月、訪中した日中友好協会会長の野田毅元自治大臣に対して唐家璇中国國務委員が「日中関係の改善は小泉首相に期待しない」とまで踏み込んだ表現で小泉前総理の靖国神社参拝問題を批判し^{※2}、また王毅駐日本中国大使は日中関係が悪化した原因を「前の日本の指導者が A 級戦犯を祀る靖国神社への参拝を独断専行で堅持した」ためとし、安倍新総理になってからの日中関係改善は「両国関係に影響を与えるこの政治的障害」を克服したためであると述べたことから^{※3}、中国の対日姿勢における「靖国問題」の大きさを垣間見ることができよう。

日中間の政治対話も途絶えた。安倍晋三新首相が 2006 年 10 月 8 日に北京を訪問し、胡錦濤国家主

※1：本稿は、2006 年度から開始した、東アジア総合研究所「東アジア歴史問題調査」プロジェクト、2006 年度夏季「日中歴史問題調査班」の成果報告書として作成するものである。本稿における一切の文責は筆者にある。

※2：翌 9 日、孔泉中国外務省報道局長がこの発言に対して「大きな困難に直面している日中関係への中国政府の見方と主張を全面的かつ詳細に紹介した」と述べ、個人的見解でないことを裏付けている (<http://www.china-embassy.or.jp/jpn/fyrth/t234656.htm>)。

※3：「王毅駐日大使に聞く(2) 中日関係立て直しの原因」【人民網日本語版】(http://j.peopledaily.com.cn/2006/12/12/jp20061212_65868.html)2006 年 12 月 13 日。

席と日中首脳会談を行ったが、これは小泉前総理が2005年4月に胡錦濤国家主席とジャカルタでのアジア・アフリカ会議で会談して以来、1年半ぶりであり、首相の中国、北京訪問は小泉前総理が2001年10月に北京、盧溝橋を訪問して以来、じつに5年ぶりである。安倍総理はかねてから日本の総理大臣の靖国神社参拝を支持し、自身も官房長官であった2006年4月に靖国神社を参拝している。しかし首相に就任してからは「私が靖国神社に参拝したかしなかったか、するかしないかについて申し上げない、それは外交的、政治問題化している以上、それは申し上げることはない」と^{※4}、小泉前総理とは異なり、靖国神社への姿勢を公式には明確にしない。しかし、こうした首相の姿勢によって現在のところ事態は沈静化しているが、これはあくまで問題を先送りしているに過ぎない。この「問題」の根本的な「解決」のための措置がとられたわけではない。そうであるならば、いつかまた、必ずこの問題は再燃することになる。

現在、ASEAN+3、東アジアサミットなどを中心として、東アジア地域における相互依存関係は急速に深化しており、その中でも日中関係は非常に重要な位置を占めている。また二国間関係に限定したとしても、日本と中国は互いを「最も重要な二国間関係の一つ」としている。そのような中において、「歴史問題」は日中関係の全般に深刻な影響を与え、二国間のみならず、東アジア全域において悪影響を与えることになりかねない。にもかかわらず、なぜ「歴史問題」が「解決」できないのだろうか？

筆者が歴史問題および解決にカギカッコをつけるのも、この問題の性質に即している。つまり日中間では何が「問題」であり、何が「解決」であるかを共有できていないのではないかと考えるのである。例えば小泉総理は、2006年8月15日の靖国神社参拝の際、「多くの戦没者の方々に哀悼の念を表す。二度とこのような苦しい戦争をさせてはいけない、そういう気持ちで参拝している」のであり、「私はA級戦犯の為に行っているんじゃない」と語り^{※5}、他方で中国側は靖国神社参拝を「A級戦犯は当時の日本軍国主義の元凶の象徴であり、A級戦犯のいかなる美化や肯定」するものであるとする^{※6}。ここに日中間の認識の相違が存在するのである。

本プロジェクトの概要

上述した問題意識をもとに、本研究所では2006年度から筆者を中心に「東アジアにおける歴史問題調査」プロジェクトを発足させた。本プロジェクトの最大の目的は、これからの日中関係、そして東アジアを担う学生たちにこの問題を考える視座を提供することにある。この「問題」の「解決」が見えない以上、日中の学生たちはこれから先もこの「問題」と付き合っていかなければならない。

同じ事象に対して、解釈が異なるのは、先の例に見たとおりである。そうしたときに重要となるのは「事実」と「解釈」を分けることである。「本当にあったことは何なのか」と、「それをどう評価するのか」を峻別しなければならぬ。評価は見方によって異なる。育った国や受けた教育が異なれば、見方が異なるのは当然のことである。それでも事実の共有はできるはずだ。事実を共有した上で、解釈について

※4：「中国訪問に関する内外記者会談」『首相官邸ホームページ』、(<http://www.kantei.go.jp/jp/abespeech/2006/10/08chinapress.html>)、2006年12月12日。

※5：「小泉総理インタビュー」『首相官邸ホームページ』(<http://www.kantei.go.jp/jp/koizumispeech/2006/08/15interview.html>)、2006年12月13日。

※6：「王毅駐日大使に聞く(2)中日関係立て直しの原因」『人民網日本語版』(http://j.people.com.cn/2006/12/12/jp20061212_65868.html)2006年12月13日。

の違いを相互に学ぶ。自分が重要だと思ふ考えを尊重してもらいたいのなら、相手が重要だと思ふものを尊重しなければならないだろう。

2006年度はその第一歩として日中間に絞って、「事実」と「解釈」の確認を試みた。

事前の学習を経た上で、8月21日から28日までの日程で1.東京:靖国神社、東京大空襲戦災資料センター 2.中国・北京:盧溝橋、抗日戦争記念館、3.中国・南京:南京中国近現代史史跡博物館、中山陵を訪問調査した^{※7}。学内から日中関係に関心の深い日本人学生4名、中国人留学生2名を募り、また一般から学生1名、70代の方2名、参加していただいた。これに筆者と共に中国人教員が加わることで、多様な角度からこの「問題」を確認し、検討することが可能になった。

調査の中で、世代、国籍、立場を越え、「事実」の確認と「解釈」についての相互の理解、論争が生まれたことは、1つの大きな成果である。

2. 活動報告

以下では実際に行った訪問地での活動内容について、参加メンバーの感想を中心としながら報告する。

東京

8月21日に金沢から東京入りした我々は、翌22日午前、第一の目的地である靖国神社を訪ねた。第一鳥居をくぐり、大村益次郎銅像を経て拝殿、そして各自で「見学」をする。ここで「参拝」ではなく見学としたのは、参拝したいものはすれば良いし、参拝したくないというのであれば少なくとも良い、各人がそれぞれの信条に従い、行動することを重要視したからである。とりわけ中国人の参加者にとって、靖国神社を参拝することには抵抗があるだろう。だが、ひとまず実物を目にする事、その中で自分が抱いていた想像（これにはこれまで周囲から受けていた教育、目にしてきた報道なども含まれるだろう）との差異を改めて考えることが非常に重要である。



靖国神社にて

「先生、右翼はいないの?」(日本人男子学生、未来創造学部3年)

学生から最初に飛び出した質問である。決して冗談で言っているのではない。本気で靖国神社とはそ

※7:当初、南京では日中間のみならず米国なども含めて論争が続いている「南京大虐殺記念館」の訪問を検討していたが、2006年から2007年末にかけて改修を行っている最中であり、見学はできないとのことであったため、訪問は断念した。

ういった存在だと考えていたのである。

訪問したのは終戦記念日からちょうど1週間がたった日であったが、神社は非常に静かであった。学生たちにとっては意外というよりも、拍子抜けだったようである。靖国神社の報道に接するときは、たいていの場合、非常に騒がしい。報道陣でごった返し、街宣車からスピーカーで大音量の主張が流される。ましてや中国では、靖国神社は日本の軍国主義の象徴として描かれ、日本の「悪」しか靖国にはいないと思われている。日本に留学して、必ずしも中国で知らされていることが全てではないことを知っている学生にとって見ても、靖国神社の実物とイメージの違いは新鮮だったようである。

そして、「先生、参拝ってどうすればいいの?」という学生もいたので、二礼二拍手一礼という神道形式、つまり普通の神社と同じで良いと教える。やはり靖国神社というのは非常に特別な存在であり、一般的な神社とは異なる作法が必要であるとの印象も強いのだろう。ちなみに留学生たちは見学のみで、参拝はしなかった。

そしてそのまま遊就館を見学する。遊就館は靖国神社境内に併設された博物館であり、神社の祭神にまつわる資料が展示されている。館内のロビーには零式艦上戦闘機やタイから返還された泰緬鉄道（先の大戦中に日本軍によって建設・運行されていたタイ・ビルマ（ミャンマー）を結ぶ鉄道。1979年に日本に帰還した）が展示されている。特に泰緬鉄道のC56型31号機関車は、石川県七尾を走行していたものが徴用されたものである。靖国神社という非常に「遠かった」存在が、地元・石川県とのゆかりがあることに不思議な感情を持ったようだった。

館内は参加者みんなが興味深く見学をしていた。「西洋の衝撃」から始まる東アジアの近現代史、そして日本の開国から敗戦に至るまでの過程を、写真・展示を見ながら話し、教えあった。もちろん知識が足りない部分も多く、筆者への質問も多かった。とりわけ留学生にとって、「日本側の視点」から描かれた近代史に接したことはなかったため、非常に真剣な眼差しで見学をしていた。

「靖国神社は、A級戦犯のためのものだと思っていました。だから小泉首相が参拝をするたびに、日本は戦争をまったく反省していない、いつかまた侵略するかもしれないと思っていました。けど、そうじゃないんですね。」

戦争で命を落とした将校たちの遺影を前に、一人の中国人留学生はそう発した。英霊の多くが自分たちとそう変わらない年であったこと、「今度会う時は靖国神社に来て下さい」という手紙、また「桜花」や「回天」という戦争末期に敢行されたいわゆる「特攻」兵器を目にし、日本の戦争を深く考えていたようであった。

午後は、江東区にある「東京大空襲・戦災資料センター」を訪ねた*8。東京大空襲のビデオや展示を研究員の方に丁寧に解説していただいた。被害の規模、過程の説明を受け、そして空襲を目の当たりにした方の描いた絵を見て、アメリカ軍爆撃機B29から投下された焼夷弾を自分の手に取り、あまりの高熱で灰になった人々の写真を前にし、その悲惨さに衝撃を受けていた。

石川県は米軍の空襲を受けなかった数少ない地方都市のひとつであり、そのせいもあってか、石川県の学生は空襲について見聞きする経験がほとんどなかったようである。また中国人留学生にとって見れ

*8：東京大空襲戦災資料センター (<http://www9.ocn.ne.jp/~sensai/>)。

ば、被害者として描かれる日本人の姿はやはり想像外のものであったようだ。学生たちが口々に、「もう戦争はしてはいけない」と話していた。センターの方から、この東京大空襲は語り継がなくてはいけない、だから多くの学生に見学してほしいとの申し出があった。センターを見学した我々も同じ思いを持った。



中国人民抗日戦争記念館にて

北京

8月24日、第2の訪問地である北京、盧溝橋および併設されている中国人民抗日戦争記念館を訪れた。盧溝橋は1192年に完成したといわれ、非常に歴史の深いものである。マルコ・ポーロの東方見聞録の中にも「世界中どこを探しても匹敵するものはないほどの見事さ」と評され、「燕京八景」の一つでもある。また清朝乾隆帝の「盧溝曉月」の石碑があり、今でも中秋の名月には月見の名所として人気があるという。橋の欄干には501の獅子の彫刻が並び、全てが異なる姿、表情をしている。1つの彫刻に複数の獅子が刻まれ、ガイドの劉さんによると北京では「盧溝橋の石獅子の数は数えられない」という諺があるそうだ。非常に雅やかな場所である。

その盧溝橋で、1937年7月7日、日中戦争の火蓋は切って落とされた。いわゆる盧溝橋事件（中国では7.7事変）である。この事件から、日本軍と中国国民党政府との間で7年にわたる戦争状態に突入した。この歴史的事実を踏まえ、2001年10月8日、小泉首相は盧溝橋を訪問、抗日戦争記念館で献花した上で、「侵略によって犠牲になった中国の人々に対し心からのお詫びと哀悼の気持ちをもって、いろいろな展示を見させていただきました」と謝罪した^{※9}。日本の政府首脳としてはじめての当地での献花であり、現職の自民党の首相としてはじめての盧溝橋訪問であった。これに対して、会見した江沢民国家主席（当時）、朱鎔基國務院総理（当時）からも、肯定的な評価を得ている^{※10}。

そこで我々もこの地を訪問し、日中戦争の時代に思いを馳せた。

「こんな静かな、きれいなところで、戦争が始まったのか・・・」

そう、学生の口から漏れていたのが印象的である。

そして抗日戦争記念館を見学した。入り口に展示されている、勇ましい姿をした中国軍のモニュメントの迫力に圧倒される。「日本の侵略に立ち向かうぞ」という気迫が伝わってくる。

館内の展示は中国語であり、そのため日本人は中国人留学生に聞きながら、また中国履修者は自力で

※9：「中国人民抗日戦争記念館訪問後の小泉総理の発言」『外務省ホームページ』（http://www.mofa.go.jp/mofaj/kaidan/s_koi/china0110/hatsugen.html）、2006年12月13日。

※10：「小泉内閣総理大臣の中国訪問」『外務省ホームページ』（http://www.mofa.go.jp/mofaj/kaidan/s_koi/china0110/gh.html）、2006年12月13日。「朱鎔基総理、小泉総理と会見」『人民網』（http://www.people.ne.jp/2001/10/09/jp20011009_10123.html）、2006年12月13日。

読みながら、熱心に展示を見学していた。数人の学生は一人で写真を中心に展示を見てまわっている。日本人学生にとって、非常に衝撃的だったようだ。中国側からの視点で見た日本の中国侵略の歴史と、中国の描く日本軍の残虐さを真剣に受け止めていた。また東京での体験をあわせて考えながら、日本と中国との認識の相違を感じていたようである。

他方で、「思ったよりも …」という声も上がった。日ごろ目にする報道から中国の反日感情はもっと苛烈であると思っていた、だから抗日戦争記念館であればもっと残虐な日本の姿を描いていると思っていたというのだ。記念館最後には小泉総理が訪問した時の写真が展示され、日中がこの歴史を乗り越えていかなければならないというコーナーが設置されている。中国は共産党一党独裁の国であり、政府の方針によってこういった記念館の展示は入れ替えられるという。そうであれば、小泉総理が靖国神社を参拝した直後のこの時期にも日中友好の展示を掲げ続けることは、中国側がいかに関係改善を願っているかを端的に示しているのではなかろうか。他の参加者からも「中国側は日本を批判するだけだと思っていた」、「中国は日本のことを嫌いなだけだと思っていた」、「中国も日本との関係を大切に思っているんですね」との感想が聞かれた。いかにイメージが先行しているか、理解できるのではないだろうか。

印象深かったことは、小学校の低学年と思しき子供たちの一団が、学校の行事なのか見学をしていたことである。これがいわゆる「反日愛国教育」とは思わないが、折に触れ歴史に触れる機会の多い中国の学生と、それにほとんど触れないままの日本の学生とでは意識に大きな違いが生まれるのは当然のことであろう。

南京

南京は非常に暑い町だった。武漢、重慶と並んで「中国3大火炉（ストーブ）」と言われるだけのことはある。学生たちの体力を一気に奪う暑さだった。ガイドの方さんからは、最高で40度を越える、だが8月末のこの時期は「だいぶ涼しくなってきましたね」とのこと。一同、その言葉にさらなる衝撃を受ける。

南京は江蘇省南西部の省都であり、人口600万人を越える大都市である。かの三国志、呉の都であり、それ以来、6つの王朝の都になった。中国四大古都の一つに数え上げられる、非常に雅やかな雰囲気も漂わせていた。

我々一行は8月26日、孫文が眠る中山陵と、2003年に建設された南京中国近代史遺址博物館を訪問した。

孫文は中国の近代化を達成するため、三民主義（民族・民生・民権）を掲げ、「西洋の衝撃」によって列強に侵蝕され弱体化した清国の打倒を目指した。そして1911年、辛亥革命を起こし、翌年1月、孫文を臨時大總統に中華民国臨時政府を成立させ、ついに清国を打倒した。その後、袁世凱に政権を譲った孫文だが、袁と対立して日本に亡命、各地で軍閥が割拠する中国を統一しようと奔走するも、1925年、北京でその生涯を閉じる。

南京に埋葬された孫文は、今でも中国で高く評価され、「国父」として愛されている。その証拠に我々が中山陵を訪問した日にも、残暑が非常に厳しかったにもかかわらず、老若男女、多くの参拝客が墓道の階段、392段を登っていた。

南京中国近代史遺址博物館は、中華民国臨時政府および1927年、蒋介石が樹立した南京国民政府の総統府の跡地に建設された。当時の建物そのままに、内部には孫文や中華民国にかんする様々な資料が展示されている。

2005年には台湾、中国国民党の連戦主席率いる「大陸部訪問団」が訪れてもいる。そういった兩岸関係の変容も影響してのことだろう、展示の内容が非常に意外であった。蒋介石が「愛国者」として、抗日戦争の英雄の一人として描かれているのである。

現在の中華人民共和国は、国民党との内戦に勝利した中国共産党が建国したものである。その後、蒋介石は国民党とともに台湾へ逃れ、中華民国を台湾で存続させた。それ以来、中華人民共和国では、蒋介石を中国を分裂させた「極悪人」としてきた。

90年代に民主化を果たした台湾、中華民国では李登輝総統のもと「台湾認同（台湾アイデンティティ）」に目覚め、2000年には中国からの台湾独立の色彩が強い民主進歩党（民進党）から陳水扁が総統に選出された。李登輝は中国と台湾の関係を「特殊な国と国との関係」とする「両国論」を発表し、陳水扁は中国と台湾は別であるとする「一国一辺」論を発表した。それに対して、蒋介石と共に台湾へ渡り、現在では野党となっている国民党は、「1つの中国」を掲げ続けている（中国が中華民国か、中華人民共和国かはさておき、中国は世界に一つであり、台湾もその中に含まれる）。中華人民共和国はこうした台湾の動きを警戒したがために、国民党との関係改善を模索し、さらには蒋介石を共産党と共に日本の侵略に立ち向かった愛国者として描くようになったのではないだろうか。こういった現在の中国が抱える葛藤の中にも、日本の存在が非常に大きいことが伺える。



南京中国近代史遺址博物館にて

それはさておき、ここが我々「日中歴史問題調査班」、最後の訪問地である。これまで学生たちとともに、多くのことを考え、話し合ってきた。学生たちは、

「結局、なぜ、歴史問題があるのだろうか？」

という問を、旅の終わりに改めて考えていた。しかし、1つの結論は出ない。それぞれが出した結論のすべてを尊重したいと思う。

1つの共有できた理解として、先の戦争に対して、中国人と日本人とでは前提となる認識が異なっているということがある。中国人からしてみれば、「日本に侵略された戦争」であり、「日本に勝利した戦争」である。他方で日本人からしてみれば、「アメリカに負けた戦争」である。こうした認識のズレこそが、歴史問題を複雑にしているのかもしれない。

3. 教員所感

多くの日本人にとって、戦争は非常に遠いものであり、常日頃から接するというものではない。ましてや日本の教育では、先の大戦に触れないままに課程が終わってしまう。他方で中国人にとって、歴史は非常に身近なものだ。南京出身の学生は、今回訪れることができなかった「南京大虐殺記念館」へ、小学生のときからたびたび学校の行事で見学に行っていたという。そのため、そういった中国人留学生からは「日本人は戦争を知らなすぎる」との不満の声が上がる。

しかし今回のプロジェクトを通して、お互いに知らないままに誤解をしていたこと、考えもしなかったことがあまりにも多いことに気付いてくれた。その上で、それでも見解の相違が残るのは当然であり、そして「相手がそう考えるのも当然だろう」と相互に尊重しあえるようになったと思う。そうした相手との違いを知ることが、相互理解のとても重要な第一歩になってくれるのではないだろうか。

「実際に中国に行ってみなかつたら何も知らないまま、何も考えないまま、中国人は日本人のこと嫌いなんだって思い続けていたと思う。」

「日本人が靖国神社を参拝する気持ちが、少し理解できました。それでもやっぱり日本の首相が靖国神社を参拝することには納得いかないですが、これまでのような批判はしないとします。」

「やっぱり戦争は良くないよね。60年経っても恨みが残ってるもんね。」

こうした気持ちを日中双方の学生が持ってくれた。このプロジェクトが一定の成果をあげたと言って良いのではないかと思う。

最後に、日中友好の歴史についても述べておきたい。

我々が中国に降り立った北京首都空港は日本のODA（政府開発援助）によって建設されたものである。1979年に開始した対中ODAの総額は、現在までで3兆円以上である。中国が受けたODA総額の6割に近い。日本は中国の最大の援助国であり、中国の発展にとって日本の援助は不可欠だったと言って良いだろう。また、中国近代化の父といわれる孫文も日本との関係が非常に深い。多くの日本人が、孫文の革命を支援していたのである。辛亥革命の中心を担った中国革命同盟会は、孫文が日本で結成したものである。孫文の愛称を孫中山というが、「中山」も孫文が日本に亡命していた頃に気に入っていた邸宅の名前である。こうした日本が中国に対して行った貢献の事実を多くの人は知らないか、または重視をしないのは残念である。

今回、南京から上海へ移動するバスの中から、多くの日本企業の工場を見ることができた。日本貿易振興機構（JETRO）によると、在中国日本企業は2004年末で19779社であるという。また日中貿易は2005年で総額1,894億ドル、中国にとって日本はEU、アメリカに次ぐ第三位の貿易相手国であり、日本にとっては中国は第一位の貿易相手国である。日中双方共に、相手がいなければ経済が成り立たなくなりつつあるのだ。そうした相互依存関係を改めて認識する必要があるだろう。

日中関係は歴史問題が全てではない。しかし歴史問題が重要な一部であることには間違いないし、この問題がなくなることもおそらくはありえない。

2008年には日中の歴史共同研究が発表される。これによって、日中間で多くの歴史の事実が確認されるだろうことを期待したい。しかし政府や学者にだけ任せておくのでは不十分だ。日中関係の将来を

担う学生にこそ、歴史問題があるという事実から目をそむけず、正面から考え、大いに論争をして欲しい。1980年代、日本とアメリカは、ありとあらゆる面で摩擦を起こした。そして幾度となく衝突をした。現在の日米間の強固な関係はそうした論争の結果、もたらされたものである。そう考えたとき、日中関係を強固なものとするためには、摩擦や論争を避けてはなるまい。「百聞は一見にしかず、百見は一考にしかず、百考は一行にしかず」という。まず歴史の事実の確認を、その第一歩として実際に現地を訪れることをして欲しい。

4. 学生所感 未来創造学部2年 西岡英美

私はもともと中国にはあまり興味はありませんでした。でも大学の授業やゼミで先生から中国について学ぶうちに、少しずつ中国に興味を持つようになり、この夏、東アジア総合研究所の夏季プログラムに参加してみようと思いました。実際に参加してみて、今までに考えたこともなかった、いろいろな問題に触れることができ、いろいろと考え、そして自分にとっていい刺激になりました。

今回、私たちの調査班はただ中国に行くだけではなく、日本側から見た歴史問題、中国側から見た歴史問題を調査するのが目的でした。最初に東京、次に北京、南京、上海の順にまわりました。その中でも私が特に印象に残ったのは、東京大空襲戦災資料センターと北京の抗日戦争記念館です。

東京大空襲戦災資料センターでは東京大空襲のときの貴重な話を聞き、そのときの資料も見せていただきました。東京大空襲では爆撃がひどくて、避難すべきと分かったときにはすでにあたりは火の海で、たくさんの方が亡くなったことを知りました。もっと早く避難しなければいけないことを知っていたら、教えることができたなら、もっと多くの方が助かっていたのに・・・、そう感じました。東京大空襲で無くなった人達の遺体は、大きな穴を掘り、そこにモノのように投げ入れられ、埋められたことも初めて知りました。そのことをひどいと感じるとともに、あの当時はそれが精一杯のやり方だったのだろうと思うし、今の私たちが想像もできないほどのたくさんの死体の量だったのだろうとも感じました。子供を抱きかかえたまま亡くなった人や、灰になってしまい、半分くらい体がない人の写真を見て、とても悲しい気持ちになりました。東京大空襲は、私が中学や高校の頃に見聞きした、広島、長崎の原爆の資料やお話と同じくらい、衝撃的なものでした。私は、戦争は絶対にしてはいけないし、人と人が殺しあうなんて憎しみしか生まない、とても無駄なものだと感じました。

抗日戦争記念館も印象的でした。ここでは、日本人が中国人にしたことや中国側の考えを見ることができました。でも私が想像していたのとは違いました。何が違ったかというと、抗日戦争記念館では私が思っていたよりも、残酷な写真などの展示が少なかったのです。高校のときの授業では、日本人は刀の切れ具合を見るのに妊婦さんを切っていたとか、まったく人間扱いをしてはいなかったと聞いていたのもっともっとひどい展示物があるのだとおもっていたのです。でも日本人が中国人にひどいことをしたのも確かなことです。

私はこの歴史調査でわかったことは、日本は東京大空襲や原爆でひどい目にあったアメリカに恨みを持っているが、中国はひどいことをした日本に恨みを持っている。しかし一方のアメリカと日本はお互い戦争だったのだし、仕方のないことだし、お互い様だというような考え方もできる。でも日本人の私が思うのは、アメリカに対して「あんなにひどいことをしたんだから、謝罪だってすべきだし、今でもそれで傷ついている人がいることを知るべきだ」と思う。しかし、それは中国が日本に思っていることと同じだ。私たちが中国に対して、「あの時は戦争だったんだししかたない」というのは、アメリカ

側も同じ考えだろう。これでは歴史の問題は絶対に解決しない。

日本人はもう少し中国のことを分かってあげればいいのではないかと思う。自分たちの痛みばかりを主張し、押し付けるのではなく、人の痛みも分かってあげることも大事だと思う。それが日本人と中国人にできたなら、もしかしたら歴史問題が解決する日がくるかもしれない。お互いに憎しみあっても何も始まらないし、お互いに歩み寄ることが大切だと思う。歴史問題は言葉ではいえないくらい難しいことだったので、私は今すぐではなく時間をかけて、慎重に解決していけばいいのではないかと思います。